新體詞選

山田武太郎編輯

版權所有

東京　香雲書屋藏梓

新体詞選自序

爰ゐ集をし新体詞い、おのれの外ゐ數名の友人諸氏の作ゐして、皆文法をば謬らず。唯佳作と云べきい、僅ゐ二三篇ながら、(傑作い一篇も無ち)五六年来我國ゐ現れさる物の内ゐて、ちの和讃の、鞠唄ゅ、さらぎば西洋文章の直譯ゐい非ぎや、と訝る迄ゐ氣韵無く、而も文法謬りたる新体詞より優きる事、豈一等の比おらんや、といへば看客諸彦の中ゐい、自負なりとして

嘲り笑ひ、過言なりとして怒る人、無きましもあらざるべけれど、かくては諸彦も具眼ふあらじ。畢竟右の物どもをば、何故に、氣韻無く、文法誤りたるとをるか、其詳細は舉げなんは、いと〳〵容易き事ながら、流石にをおしく其作者の名譽ふ關をる事ふれば、あへて今は之を言はぢ。そも乞れおば詮方なし。然れあれど、其作者とて、よも巧拙を判定をる力無きまもあらざるべし。力無きまもあらぢして、鞠唄めきたる新

体詞を、世に出だしゝ、た只に是、新体詞として早く世に、廣まらせんとの方便ふらん。ろれにて滿足をる如き卑屈の人ふ非ざるべければ、何を憎て、のまろくと、短處を深く穿たんや。されど俗曲改良の美事えやうやく初まるべき折のらなるに、此頃は、世に新体詞の勢力も、稍熾にふるものゝら、ののグリースのペリクルス、頻に歌曲を奬勵ふて、もて國民に美術の識を得さしめし其如き結果を得べき方法の一端をこふく現

れたる嘉瑞ありと思ふうましさふ、早くまた鞠唄め
紀たる、、、和讃めきたる、、、直譯めきさる物ども全
く跡と絶え、真美真佳の新体詞の、あらいれなんを願
ふの伺まり、憎まれ口をたゝくふなん。希くい江湖の
才子望むらくい一二の作者。その巧拙ふ至りてい、才
子諸君の具眼ある、作者諸氏の博識なる、おのれが評
を俟たぞとも、既ふ知らせたまふべし。唯小成ま安ん
ぜぞ。進取の氣象をはげまして、よしや傑作ふらぞと

も、せめてい和讃、鞠唄めうず、又直譯めきたらぬと、作
り出ださせたまえん事を。ゑまぐむに是非の差別無
く、西洋風を持込ゑて、日本固有の美妙の趣味を、汚を
おどいふことい厭ふべ去、嫌ふべし。

ひのえいぬ葉月のはじめつかた
美妙齋ま て讀書のいとま

樵耕蛙船
去るす

新体詞選總目録

第一　書生歌　一節
第二　士卒の夢　六節
第三　隅田川花見　一節
第四　佛國革命歌　一節
第五　行燈　一節
第六　戰景大和魂　八節
第七　路易帝斷頭臺　五節

第八　古戰場　七節
第九　大川友右衛門　六節
第十　リツプ、バン、ウンクル　十節

右通計一十篇凡四十六節

緒言

一我邦の文章は、歐州文にある如きパンクチユエーシユン（句讀法）といふものなし。是語法の醫昧なるゆゑ、亞ぎて、缺けたる處あり。今此中の新体詞ゆゑ、新ゆ句讀法を作り、以て句脚を切りたれども、發販をさへ急ぐゆゑ、いまだ備ま校正せず。誤謬なども多からん。それらはやがて此後に、改むる事有るべければ、あばらく見赦ゐたまへかし。

新体詞選

山田武太郎編輯

○第一　書生歌　緑山散史

國は何處ぞ百里外。
親しき人と手を分ち、
立てゝは堅き志、
矢竹心のいさましく、
きつゝなれまし敝衣、
花の都ま程遠し。
頼みし親の膝を去り、
岩をも徹せ桑の弓、
東の空ま遥々と、
いつかは飾る綾錦。

股に錐刺ち。壁穿ち、
粗食ふ堪へて膝枕。
身を立て名をば揚雲雀、
千歳まかをる功績を、
勉めよ君よ勵め君。
諸葛もむかし書生なり。

○第二　士卒の夢

四面も寒き夜半の風。
千辛嘗めてまた万苦。
假寐の夢の覺る間も、
鷄の群ある鶴とおり、
立てん心を忘れじな。
將相何ぞ種あらんや。

延春亭主人

篝火さへも消果てゝ、
寄来る敵の影遠く。
友呼代れを聲をなり。
木蔭ふひとり太刀劍、
昔を思續けつゝ。

遠き方よて屍を、
吼ゆる聲だふ凄じく。
殺せ〜敵の怨靈が、
杉の梢ま梟の、
時を守れる老兵が、
杖となしつゝ倚懸り。
立てる姿ぞ憐なる。

貪啖ふ狼の、
山の端青き月の顔、
恨を含む如くまて、

松虫すだく尾花まは、
ひとり行む老兵の、

夢ふぞ歸る故郷の
茲も昔は生死の
わが友人が其骨を、
松こそ茂れ。蟋蟀の、
胸まで溢るゝ懷旧の

契りし友の招くかゞ。
眠れる影ぞ憐ある。

幾重の山路草深く、
海ゥ劍の山間まで、
埋めし所尋ぬれば、
後を吊ふ聲ばかり。
涙を呑むぞ憐ある。

或い歩む野邊の路、
湧さもたつなる峯の雲、
戯狂ふ山羊羊、
ありし昔まかいらねど、
見る物まつけ、己をば、

家まで歸りて、父母まで、
思はさしも深緑、

見ま撫子れ花の露、
清く流るゝ谷の水、
昇り棚引く薄烟、
變りはてした我身ぞと、
唯つ心ぞ憐ある。

さす盃い淺くとも、
待とし聞けばいとゞ猶、

妻子の面もなつかしく。
遂ゐ濡らを袖袂。
慰めかねて老兵の、
互ゐ昔語合ひ。
そも理といふばかり、
悩む姿ぞ哀なる。

‖我伏をこしく待ぬへ。
旅れ疲憊も無らしな。
右左より縋着く
流石ゐ猛き老兵も、
父上兒をも倶ちたまへ。
憩ぬへやちばらく‖と
妻と我子の聲聞けば。
床ゐ轉ぶと見し夢の

裡ゐ聞ゆる喇叭の音。
起さてぞ修羅ゐ急ぐらん。

○第三　明治十五年の四月隅田川原ゐ花を觀て

美妙齋主人

武藏の國れ江戸らゐ、
歌仙櫻の埋きにし、
高峯ゐ咲ける兒櫻、
憂しや二八の春らとよ。
ろれを思へば。茲もまた、

藤原信尋公の歌「きてみれむ。武藏の國の江戸からゐ、北と東の隅田川哉。

来て見れば。
北と東のをみだ川。
ろきさへあるゐ。大比叡の
花盗人ゐ盗まれて。
彼岸櫻ゐ行きたりし

そゞろ昔れ事どもを、
今日ハ彌生の中つゝさ、
霞も七重八重ざくら。
見亘を方ハ雲ゝそも
茁も消えて暮行けば、
梅柳山の鐘の音ゝ、
亂れて亂れ散る花ハ、
あら慘たしや其昔。

忍ぶが岡といふべけれ。」
風和らかく吹くのゝゝ、
空さへ匂ふ花曇。
ながめ吉野れ山櫻。」
梢に眠る朧月、
ゆらめく枝や亂もらん。
かざせる袖ゝ浮摸樣。」
あら珍づらしや今の今日。

色ハ匂へど散りぬれば、
薄雲ゝしも消さるれば
今日紅顏と見えさるも、
ゝるみれ浦の夕千鳥、
露の命と知るからハ、
名を殘さゞば、生來ゝ
海にもやがて、よどまずば
是ぞ盛者れ必衰か。
是ゞ真如のことゝりの。
翌日ハかハりて白頭と、
千代と鳴く音ハ誰が爲ゞ。
勉勵をて後の世ゝ、
其甲斐とてもあらなみれ
此川水も出でつべし。

○第四　佛國革命歌　梅　廼　家

國の光も自由のみ。
天の我等を作りしよ、
人の下なる人もおし。
吾より高きものおしと、
利欲の鬼と壓制の
酒色よ奢り、稅を增ち、
漂ふところ森林。
咲くゝ尾花ゐ血の雫。

民の譽も自由のみ。
人の上なる人もなく、
さるを何ぞや暴君が、
國を忘るゝ高枕。
惡魔よ驅られ、使ゐれつ、
奪果てゝゐ小民の、
雪降積る野の路よ、
逃るゝ道も楢の木の、

枯れてゐ凄き山の月。
腹ざよ飽かば歸るおり。
下よ立つおる身のつらさ。
いつまで斬でおくべきぞ。
神は自由の血を好む。
惡魔の城となすべきか。
那方よ見ゆる白雲ゐ、
うの黑雲のあおたよゐ、

夜半ゐ追來る狼も、
飽きても逐へる暴君の
恨ゐつもる彼惡魔。
自由は民の劍おり。
茲、我等が父母の國。
鬼の住處となをべきう。
祖先の精靈こもるおり。
自由の鄕の在るなるぞ。

骨もて築け城砦
崩せや崩せバスタイル。
死ねや死ね〳〵國のため。
死ぬも生さるも國のため。
降来る雨ゐ強くとも、
天の賜ひし此劍、
いつまで勝たで有べきぞ。
進めや〳〵人々よ。

血とゑて洗へ我身体。
我ゐ與へよ麵包と水。
斬れや斬れ〳〵この惡魔。
死にて甲斐ある時なるぞ。
惡魔の勢ゐ多くとも。
吾手ゐかくも持ちらい、
いでや人々疾進め。
自由の劍抜きかざせ。

國ゐ自由の風なくむ、

○第五　行燈

彌董の姿色有りもせで。
自惚あるばかッポレを、
舞蹈を學ぶ偽紳士も、
行燈からで最暗き
僅ゐ掩ひのくしづま。
油もやがて月の末。

此民草をいのからん

蛙　船

紫帽子かぶりたる
躍るとおなじ心ゐて。
世ゐ頗ありあけの
心の闇ゐ黄金もて。
詰る處ゐ融通の
熬付けられし下血ゐ、

昔おがらの空丁子、
出されし勘定書何ぞと、
張りて塞がんやうもおく、
吹消さるゝを如何ふせん。」
心は玻璃の最清き
電氣燈ともらいらぎば、
得べき術とてあらぎろし。
光添ふべき由えおし。

丁子の亡骸堆く、
紙のやぶれし隙間をば、
張らぎば夜風の短兵急、
されば是等は廢果て、
洋燈尾斯燈至乃また、
文明世界の骨髄ぞ、
旭の影ふ一入の
國の光を遠近ま、

赫かをべき法もおし。
やよ廢れかし。廢ぎのし。

○第六　戰景大和魂

敵は幾万ありとても、
烏合の勢ふあらぎとも。
邪はそれ正ふ勝難く、
堅き心の一徹ぞ、
石ま立つ箭の例あり。

やよや行燈早廢ぎ。

樵　耕

をべて烏合の勢なるぞ。
味方ふ正ぎき道理あり。
直ぞ曲ふぞ勝栗の
石に箭の立つ例あり。
などて怖るゝ事や何ぞ。

などてたゆたふ事やある。

亂砲亂發百雷の
血の臭氣を運来く。
思へば死人多ちらん。
それ好き機よ。揉潰せ。
うゐ危かり。疾く救へ。
おどてたゆたふ事やある。

音凄じく吹く風ゐ、
鼻ゐかぐだに腥さ。
敵ゐ死人の多ちらば。
味方に死人多からば。
などて怖るゝ事やある。

風にひらめく聯隊旗、
旗ゐ飛来る彈丸よ、
身ゐ日本の兵士よ。
斃るゝまでも進めよや。
旗よゐ恥ぢぞ恥ぢなせぞ。
おどてたゆさふ事やある。

記紋ゑ昇る旭よ。
やぶるゝ程こそ譽ゐれ。
旗ゐゐ恥ぢぞ進めよや。
裂うるゝまでも進めよや。
おどて怖るゝ事やある。

雪を含める朝風よ、
凍ゆる手先取緊めて。
是等の響聞く時に、
さるを何ぞや武士が、
いざや敵をば破らんづ。
などてたゆさふ事やある。

こに敵中ふ圍まるぬ。

向つて嘶く馬の聲。
吹きぞ合むる喇叭の音。
鈍き心もまた勇む。
勵まぬ事の有るべ紀ぞ。
などて怖るゝ事やある。

猶豫まて事を愆つな。

こゝふ圍まれたる者に、
苦樂を同ゝせし者ぞ。
願ふても無き幸おるよ。
なるべき程に高く賣れ。
などてたゆたふ事やある。

をべて一聯隊中の
おなじ戰土の戰死に、
命を安く賣りおせぞ。
などて怖るゝ事やある。

星影寒く、夜に更けぬ。
夜政あらんも料られじ。

今宵に月も出でざれば、
鞍を下すお馬ゝふ、

秣與へて夜を明のせ。
また敵寄せなん用意しね。
すべて日本男兒あり。
おどてたゆたふ事やある。

また聞け遠砲雷一聲
味方い小勢なりとても。
などて怖るゝ事やある。

凍月高く冴亘り、
砦い元の儘ながら、
さらば敵早逃げたるよ。

平原十里風寒き。
それを守れる人もおし。
味方ね既ま克ちたるよ。

げふ戰いおもしろや。
衝崩さんづ崩さんづ。
などてたゆたふ事やある。

さらば進みて巣窟を、
などて怖るゝ事やある。

破れて逃ぐるい國の恥。
尾となりて殘るより、
疊の上ゑて死ぬ事ぞ、
軀を馬蹄ゑのけられつ、

進みて死ぬるい身の譽
玉となりつゝ碎けよや。
武士の爲べきみちおらぞ。
身を野晒ふおしてこそ、

世に武士の義と言ひ。　なほて怖るゝ事やある

おどてたゆたふ事やある。

○第七　路易帝斷頭臺の場

延春亭

第一

＝今迄住み去宮殿も、　今日より長く荒果てん。

庭になくなる鶯も、　誰ふり春を告ぐるらん。

夜半の嵐に散果てし　其白梅を見るだにも、

浮世は夢のまぼろしか。　朕も今より死出の旅

わが人民の暴逆ふ、　逢ふて黄金の冠も、

斷頭臺の朝露と、　消えなん事のはかなさよ。

一天四海は我物と、　言ひしは人の偽か。＝

かたじけなくも路易帝、　官人等に促され、

馬車の内ふぞすぐ〳〵と、　涙もろとも入ぬふ。

第二

惡魔の息か革命の　風の渦巻く巴里の街。

血を見て笑ふ狂民も、
折〻鯨波の聲をあげ、
馬車の傍に集来る。
捧げんものを、彼こそは、
睨む眼の恐ろしく、
彼を殺さば我活きん。——と
遥に彼方眺れば、
分けて進めば、程もなく、

那方這方を走行き、
今や遅しと帝王の
昔なりせば花飾、
我を苦む暴君と
——暴君殺せ暴君を、
罵る聲も凄ごく。
集まる民も數百万。
斷頭臺に着きまける。

第三

かくて帝は車より、
斷頭臺の其下に、
最麗き御姿、
蔭は那處にあるながら、
晴れたる空ゐ身も獨、
前と望めば、太刀劍、
隙間もあらぎ晃くは、
下ゐひつゝ、徐々と、
騒ぐ体なく行ゐふ。
三十にいまだ猶の木の
身を置回ねし天が下。
涙の雨ぞ降蒐る。
立込めたりし修羅の場、
春の野に生ふつばゐ草、

風ふ靡くが如くふて、
どよめく民ま手を揚げて、
帝も今ハ是迄と、
＝霎時＝とばかり止ぬふ。

第四

＝滿諸人よ朕ハ今、
空く茲ふ死をるおり。
朕ふ罪犯ば言かけし
朕今流を血をもつて、
飾となさば、幸多ま。
科なき科を蒙りて。
此世ま別れの一言ハ、
汝の罪を赦ほべし。
この佛蘭西の盛なる
滿諸人＝どのたまひし

折ま もあれや。サンテルが、
打出を大鼓の音凄く、
前に立ちたる僧正が、
御手をあハせ。伏拜ま、

第五

又も相圖の喇叭の音。
手を揚げ、身をば躍らして。
憐や帝ハ御手をば、
揚げ〻剣を相圖ま て、
今ハ悲や路易帝、
＝いざ＝とて勸る十字架ふ、
神の御名のみ唱へけり。
つれてゞ狂ふ暴民ハ、
＝殺せ〳〵＝と叫びける。
後になして、冰おす

刃の下ゐ御頭を、
目を閉ぢさして。今霎時、
新身の刃晃さて。
鐘も無常の御首を、
＝共和自由万歳＝と
御運の程と佛蘭西の

○第八　古戰場

日影も今ゐ山の端ゐ、

いとも靜ゐ置ゐひ、
合圖をそゑと待ひまも
御魂ゐ雲ゐ入相の
手ゐ振廻ゑ。暴民ゐ、
どよめきたつる其響
國の様こそあれなれ。

梅のやか拭る
入相時の鐘凄み、

行きゑふ人の跡も絶え。
おがめ悲き黄昏ゐ、
蔭ゐ一宵を假枕。

塒ゐかへる群鳥、
時雨ゐ染みし楓の
腸を斷つばかりにて。
蔭ゐ苔蒸を白骨ゐ、

草ゑ黄むめる秋の野の
風呼叫ぶ高松の
見渡を方ゐ古戰場。

影ゐ烟の中ゐ消へ、
梢ゐ叫ぶ猿の聲、
枯れて背高き篠薄の
鏃ゐ深く殘るゐり。

或ハ瀬早き溪川ヨ、
半ハ水丹晒されて、
猶怨恨をバ含むらん。
岩が根強く齧附きつ。

見る目怪き谷蔭ヨ、
傍ハ残る鎗剣。

砂ぞ埋めし髑髏の、
目も朽ち、牙も落ヨしヨ、
天ハ仰ぎし儘にして、
波ヨ夜ヨ〳〵叫ぶなり。

頽果てたる古塚の
奥ハ幽けき洞の中、

猶今ふがら矢叫の
ろえ此處ヨこそ壮士ゲ、

思へば昔此人も、
跡に見捨てゝ幾年ゥ、
御國ヨ寇す敵等と、
消えてハ苔の下塚に、

音さへ聞ゼバかをなる。
其亡骸を埋めけん。

馴れし故郷の父母を、
佩びし剣を枕ホて、
防ぎしもの哉、哀ヨも、
今も怨を呑むならん。

頼む夜毎の仇夢ゆ、
通ふて歸る魂の
母よ勸むる盃よ、
さめて朝の涙ゆゑ、

雲冪々として天黑く。
鳥も聲なく草眠り。
いとゞをぐらき谷蔭を、

隔つ海山千万里。
右よゐ父よ左よゐ、
見る故郷の月と花。
望む胡天の秋の雲。

夜ゐ溟々として鐘遠し。
風音信れて松泣ぬん。
閃出でつ飛狂ふ

鬼火ゐ今も往昔の
餘彼を殘をものおらん。

○第九　大川友右衛門　美妙齋

第一

ます〳〵荒るゝ西風ゆ、
吼ゆるが如く燃鳴りつ。
火の子の樣ゐ亂星。
頽れながらよ行迷ふ
ろの濃さ君の御惠に、

炎の勢いやまさり。
渦巻立てゝ噴出だす
火氣よ逐れてたよ〳〵と、
車輪の烟、濃げふり。
答奉らんためなれば、

やがて消えなん身の程と、
曲らぬ筆の告別。
文の字色の薄らるを、
見よとばかりは義弟なる
別をもでに告げたれば、
今は何とゞ恙無く、
思ふばかり丹友右衛門、

第二

かねて覺悟は磨墨の
此世の縁と諸共は、
涙にじみ志故なりと、
數馬はさへも人傳は、
心を殘を事もなし。
御朱印状しを救をんと、
馬状飛ばせを走来る。

對向を見れば、こはいかに、
火も移りさる体裁。
思ふものから勢も、
張りて撓まぬ心より、
哮る炎を物とせぞ。
鞍ふ伏志つゝ驀地、
やゝ近づきし其折志も、
揺と音して倒れたる、

はや御朱印の寶藏に、
とく燒落ちぬ其間はと、
また一入ふ丈夫の
逆巻く烟を事とせぞ。
儘をし馬に聲とのけ、
辛くも件の寶藏は、
馬も流石は咽返り、
さもこそ有めと預より

期たりければ友右衛門、
藏の扉ゑ双手掛け。
更ゑ動かぬ光景ゑ、
其處ゑい錠のおりてあゑ。

第三

＝こい鈍まーや。朽惜や。
鍵ゑい心注ゑざりき。
徒て阿容々々死ゑもせば。

其儘閃然と下立ちつ、
引開かんとたさきどえ。
訝りおがら倩視れば。
其身い鍵を持ちて来ず。

錠をば思附ゑざりき。
こゝまど辛く来たる者を。
殿への不忠。身の恥辱、

是ゑ上越す事やある。
そも如何せば好らん。＝と
磯と當惑たるから、
身さへ燒けんづ計りおり。
屋根も落ちんづばかりゑ。
身も燒かれゑば詮無ゑり。
今ぞ浮沈の機おるよ。
とばかりゑして腰刀、

さりとて開く法も無ゑ。
流石ゑ猛き武士も、
四方いはべて猛火ゑて。
藏ゑい炎這回り。
屋根落ちもせば望無ゑ。
今ぞ成否の境目よ。
此圖をなどか抜べきぞ。＝
抜放ちたる勇ましさ、

火丹戰へる稻妻と、

第四

かゝりし程丹友右衛門、
鍵穴深く突込みつ。
眼を強く閉塞ぎ。
念力一度凝る時は、
況んや忠義の此刀尖。
破れぬ事のあるべ紀ら。

共に鋭紀覺悟なり。

やがて件の刃狀で、
眉間に皺の寄る迄ゝ、
齒を嚙り息と止め。
石をも透を例あり。
南蠻鉄の錠ありとも、
碎けぬ事のあるべ紀の。

曳也。=とばゝり唸りつゝ、力ゝ任せくこゞるゝぞ、
刀はやがて折きたれど、さしもの錠も堪ばこそ、
ぴんと音して碎けたる、=扨も嬉=と勇立ち、
扉引開けさる程に、折も折とて藏の屋根、
忽頽れ落掛る音たさながら冥官が、
搦つにも似たる攻鼓。烈火の呵責もかくやらん。

第五

さしもの勇士も彼屋根が、落つる機會に噴出だを

けふりと灰と炎とよ、
絶えも入るべう覺えしが。
落ちたる上よ飛乘れば、
足を燒くぞよ物とせぞ。
心當の處ある
辛くも見出す御朱印の
左手よ楚と取揚げつ、
おしたるうらふ薄情くも、

面を撲たれて、暫ゐ、
さでゐ果じと氣を勵し、
下ゐ宛然火の如く、
這回ゐ挿添引拔れて、
尾を跳退け〳〵つ、
函よ得たりと雀躍ち。
火の無方よ行うんづと、
四邊の火勢強ければ、

衣を涵ち、水氣さへ、
不知火ならで前後より、
昔話の妖怪が

第六

＝早御朱印ゐ恙無く、
此身を免れるんとせば、
要こそあれ。＝と獨語ち、
撲消もからふ花吹雪、

今ゐやうやくつくしがさ。
燃移らんとする樣ゐ、
舌うと思ふばうりなり。
出だしたきども。憖よ、
千仞一簣の悔あらん。
襟ふ袂よ移る火を、
晃さあがら散りて行く

數ゝ世をぐの身の覺悟。
土を穿ちつ、返す手に、
颯とばかりゝ迸る
流石重傷に弱るゝら、
かの御朱印を疵口ゝ、
倏忽前ゝふし柴の
憎や猛火ゝ炎々と、
笑むを此世の名殘ゝて、

挿添をもてゆらがねの
我と我腹つんざけば、
血汐ゝ赤き心根や。
萎ゆる腕を勵まして、
用捨もあらぜ捻込をつ、
霎時の隙もあらばこそ、
競蒐るゝ、莞爾と、
あへなく息ゝ絶えゝけり。

○第十　リップ、バン、ウンクル　かをる

此新体詩ゝ、ワシントン、アーヴィング氏の著し、スケッチ、ブックの内ゝ、上の如き題ゝて、掲げありし文を、譯ゝさる者なり元この話ゝ新克の一紳士、テッドリッチ、ニッカルボッカー氏の傳ゝ得たるものゝて、荒誕無稽信ぜべうもざるが如くなれども、このリップより、現ゝニッカルボッカーが聞得たる

話にて、然れ之を保証をるさえも、證書をも受けし
となん且此リップが入りしカーツキル山は、以前
印度人住ひし頃より、和蘭の植民繁盛かるも、至る
まで、奇妙なる事件種々口碑に傳はりつ、印度人は
此山も、天体と支配する神住せると云ひ。和蘭人は、
神仙の窟ありとさへ信じぬれば。かゝる奇談の出
でしもまた理無きふあらぞ。其説く所、浦嶋の子の
話、武陵石室山の故事などゝ、同一轍ながら。唯珍ら

しさ儘こゝふ掲げつ

第一

夕風ゐたるハドソンの
いざよふ雲の絶間より、
山の端までも照掛る。
三百年のうのむかし。
一度こゝふ榮えさる
苔蒸す中ゐ生出でゝ、
川の水上眺れば。
夕日の光紅ゐ、
此處は名高きカーツキル。
和蘭國の植民が、
記念は今も石畳。
憐ますわの篠薄。

朽木に眠る鷺の
石の柱に彫ミてし
あふて黒きつ半身ぞ、
月を逐れ〜天人ゲ、
其佛を見る如く、
梢々の松の風。

第二

かのアメリカの十三州、
其本國のイギリスの

夢も昔と免ぐるらん。
美人の像も雨風に、
纏ふ常春藤の露の中。
下界の土に埋れ〜
音づる者ねいつさても、
是も昔ね琴の音。

命ふ背ぞて獨立ぞ、
二十餘年の前ぞるが、
（リップ、バン、ウンクルと呼たる）一人の農夫住ミまけり。
もと英國の民なるゲ、
生れ〜國の西東。
知らぬ齡に此土地ぞ、
移来りつ。耕しつ、
植ぞつ。食ひつ。其妻と、
年まだ若ぞ娘をば、
いとも貧く糊口ぞさり。
何處もおぞ貧賤の
思にかくよウンクルね、
春の高嶺ぞ咲ける花。

自由の旗を翻す」。
この山の邊に程近く

秋の海邊ふ清る月、
えのなき身とゞ啣ちつゝ、
我身ま吹けと唯ひとり、

第三

卯花垣ふ波こゆる
誰ゐもらをか一聲を、
森のうなさ狀渡りつゝ、
風の戰げゞ露の玉、

見るゐつけても浮雲の
無常の風のあと見ても、
うこつ心ぞ哀なる。

里の五月の朝ぼらけ。
忍鳴をる郭公、
門田の稻の葉末まも、
落ちくゞ鷺の羽をぬらす。

ののウンクルハ朝未明。
カーツキルの山中へ、
小草、若篠、踏分けて、
やをらひながら手を翳し。
さびたる村ふ淋くえ、
登る朝日と見えたるハ、
端に生ふ松の遠枝ゐ、
こをま驚くウンクルハ、

妻にえ告げぞ、銃をもち、
ウルフといへる犬共ま、
最奥深く入込をつ、
麓の方をながむれば、
靡くハ霧うゞ烟。
早落ちうゝる西山の
ちゞし殘をる光のを。
急ぎ山をゞおをうけぬ。

第四

鬼か、木客か、怨靈か、
風ゐあらで響く音の、
雲さへ深く湧立ちて、
リツプ々々々と呼こゑふ、
後と見れば、群烏、
森の上ゐ夕月の、
扨ゐ精神の迷うと、

谷間々々ゐ囂々と、
いと恐ろしく聞えつゝ、
常ゐもあらぬ路嶮き。
リツプゐ歩どゞめつゝ、
塒求めて鳴亙り、
さみしく笑を含むのみ。
行けば、又〳〵呼るゝゐ、

呆果てたるうのリツプ、
森ゐ至りて索むれど、
松杉柏幹朽ちて、
折しえ傍の溪間より、
頭白くて衣青さ

第五

幾千根の髮の毛ゐ
双の眼ゐ曉ゐ、

銃取直き、薄暗さ
人影も無く、年を經し
鬼かと思ふむかりなる。
靜丹歩み出来るゐ、
奇態異形の變化あり。

降積りたる白雪か。
燦殘る星影か。

背ふ負へる瓢よい、
手もてリツプを麾ぎ。
怖れながらもかのリツプ、
頂近く行見れば。
集りゐさる三四人。
頭大きく。眼い細く。
取りて食へる桃の實も、
リツプも共ま傾くる

神酒をこそいさゝふらめ。
＝此方へ来よ。＝と命ぜむ。
溪を渡りつ。岩を攀ぢ。
苔緑なる岩の背ふ、
見しこともなき顔形。
鼻のみ高さものもあり。
形瓢の如くあり。
藥酒の奇特たちまち ふ。

那方も卧せば。這方さへ。
おとづるものい聲低く、
世の様知らぬ高枕。
溪間を走る水の聲。

第六

覺むるい夢か。覺めざるも、
おぼゝじく夢ゝ昨夕まで、
こゝまありつる人々の
影も見えねば岩の上、
睡魔さませーウンクルい、
只茫然とながむるに、
曉近く殘るゐる
月い昨宵の月ならぞ。
持て来し銃も鏽朽ちぬ。
衣たる衣も敝果てぬ。

＝茲にたしかにカーツキル。麓に我の村ならん。
こゝに訝しや。兎ふ角ふ、宿りた一夜なるものと。
妻や娘も待つらん。＝と銃を片手ふおりかゝる
下、に昨日ふことかたり。渦巻狂ふ溪川ふ、
岩さへ吼ゆる水の音」。暫し呆れて立居しが。
辛くも身をば躍らしつ。行方に岩間。茅の道。
立つ木も、鳴ける群鳥も、うたりし様や啣つらん。

第七

行く路邊ふ群狂ふ
昨日と變果てふけり。
今日に賑ふ一都會。
軒をつらねて立並ぶ
人の名のみを掲ぐとに。
壁に頽れて妻も子も、
這纏ひたる樣ばかり、
涙ふ呑ぶウンクルに、
村の童の姿さへ、
さびたる村と思ひきや、
行ふ人の數多く。
家さへ聞知し事もふき
我家を見れば柱朽ち、
影だふ見えで蘿蔦、
昔の名殘とゞむふる。」
妻よ子供と叫べども。

答ふるものゝ庭面に、
つら〳〵我身をのへれば、
鬚ゝ胸まで延居さり。」
この世おるかも。先の代ぅ。

第八

町ゐいたりて辻々ぇ、
帝ジョージゐあらぞーして、
劍を持てる其下に、

降掛りつゝ鳴る葉のミ。
いつぅ頭ゐ霜ゝつみ、
‖こゝ夢なるか幻ぅ。
吾ゝ眠りて非ざるぅ。‖

掲し画をばよく視る丹。
武人が黒紀衣をきて、
華盛頓とゝ書ぅきたり。

‖是ゝ誰ゞ名ゞ我村ゐ、
折ぉも數百の町人等、
‖合衆國の士民等ゝ、
得たる自由を欲せぬか。
自由のさめゐ七年の
忘れもせずば此撰擧、
老若男女打交ゐ、
リツプの立ちし傍ゐて、

ぅゝる名の人在ける。‖
叫狂へる聲聞けば、
バンカーヒルの戰ゐ、
市民權をば拋つの。
間ゐ流ぉゝ血と涙、
来ぉ〳〵‖と呼掛けつ、
手を揚げ、身をば躍しつ、
やがて會議をはじめけり。

聞きても見ても解得ぬ

第九

＝自由よ自由勝て自由。
互ゐに競ふ折らるゐ、
寄近づきて打向ひ、
共和主義ゐて在をる。＝と
＝小可い昔の好誼ゐて、
いふゐ那方た眼を瞋らし、

リツプい黙ゐ、立居さり。

共和ゐ共和やぶれな＝と
一人の紳士いウンクルゐ
＝君い自由かあるいまた、
問いれて這方た驚きつ、
帝ジヨージゐ従たん。＝と
＝扨い此奴い英國を、

逃来りし保守黨よ
一時にかゝる暴民を、
リツプい向ひ。＝喃紳士。
＝何ニコラスと、、、ニコラスい、
＝然ばリツプを知ゐふか。＝
リツプい二十年前ゐ、

第十

＝家を出でしい昨日ぞと、
思ひしものを二十年、

毆てよ叩けゐ斬殺せ。＝と
支へつ来る老人ゐ、
君、ニコラスを知ゐふか。＝
＝ゐ二十年前ゐ死なれたゐ。＝
＝なふリツプとかあ、リツプ。
山ふ入りしが歸来ぞ。＝

いつかは過ごし此我は、
實の我の或は又、
吾が妻も子も尋詫び、
さすが握来る血の涙、
暫と留むる人見れば、
一度こゝよ住ひたる
是は我身に非ざるか。
怨詫びつゝ在おらん＝＝と
拂つ行んとせし折しも、
年まだ若き女あり。
＝君は何故リツプをば、尋ぬふぞ。君が名は＝＝、、、、
＝我名えいえど君が名を＝＝、、、、＝昔ジユデアと呼ばれたり。＝
＝御身の父の名は何と＝＝、、、、それこそリツプウンクルと、、、、

＝＝＝父が家をば出ぬひし
＝＝＝あゝ〳〵娘何ゝ娘。
＝＝＝何こは父かこは父ぞ。＝
＝＝＝去て母上は如何せし。＝
後よ空くおりたまふ。＝
おんこの父はこのリツプ。

明治十九年七月二十日御届
同年七月三十一日板權免許
同年八月十二日出版

編輯人　東京府士族　山田武太郎　東京神田區鈴木町十六番地

出版人　静岡縣士族　田口高朗　東京神田區令川小路三丁目壹番地

發兌元　香雲書屋　東京神田區令川小路三丁目壹番地

大賣捌　晩青堂　東京神田區同朋町廿二番地

香雲書屋藏版書目次

山田武太郎編輯

○續新体詞選　近刻

此書ハ前篇よりも猶一層の金篇玉什を選みたるものゝ如して、趣向の極めて面白き、筆法のいたく凄き、佳作ハ勿論、傑作も無き事あらず。江湖ハ諸君、發賣の日ゝ及ばゝ、此言の詐りならざる状知るべし。

山田武太郎著

○新体詞華　少年姿　不日出版

此書ハ、平田三五郎、白菊丸、上田俊一郎、梅若丸、福壽丸、大川數馬、及森蘭丸等、凡七少年の目覺しき處を叙詠せしものにして、數馬と除くの外ハ、をべて皆悲歌なり故ゝ句の艶麗なる中ゝ、慘凄なる風を

交へ、巧ま情態を寫出だしたる樣、なら〳〵口もて言ふべからぜ。發販の日近さにあるを乞ふ大方の諸君子よして、苟も日本文學を好ませたまふ方ざまは、一本を購ふて、其妙味を味ひたまへんことを。

山田武太郎著

○新体詞華　ひめのゞみ

右は女俠、ジャン、ダークの生涯を、例の筆もて叙詠せられさるものゝ。元来、泰西の詩人たちも、之を詩歌に詠ぜし者最多けれど此新体詞は全く其等を譜したる物まあらぜ別ま一已の想像もて、具に委曲を盡くし志なり。今草稿は十分せねど、脱稿の日は遠くもあらず。願たくは貴女令孃をはじめとして、紳士令息ゐ至るまで、一讀志て志氣を活潑ふさせたまへ。

春陽堂　滑稽堂
賣辻岡屋　大倉書店
捌吉野喜之助　松月堂
所開成堂　自由閣
金櫻堂　上田屋

（丁）	（行）	（誤）	（正）
初	三	緑	縁
三	一	速	遠
同		臬	泉
十三	八	血	皿
十四	五	至乃	乃至
二十	五	十	十
廿四	四	「君」と「と」の間、、、を脱す	消え
廿九	四	消へ	けめ
卅一	二	けん	
卅七	五	屋根の上ユ＝を脱す	
同	六	る	お
四十三	七	べうも	べから
四十四	二	カーフキル	カーツキル
四十六	三	纏ふ	纏ふ
五十	八	行の傍訓けい衍	
五十六	六	辻	辻